

米国留学中の03-04年、

立て続けに著名科学誌に筆頭著者の論文を発表、その名を世界にとどろかせた。誰もが目を見張る成果に、「運が良かった」と控えめに答える。研究は楽しい。だが、大学院生時代は研究の感触をつかむまで、実験室にこもり黙々と励んだ。元銀行員の父を持ち、生後3カ月で米ニューヨーク



東大大学院工学系  
研究科准教授

加藤 雄一郎氏

## 米国流独創性で新分野に

へ。以後、日本と海外を往

来し在住歴は米国13年、香港5年。日本で過ごした高校・大学時代は「普通に」学校に通ったが、日本での進学も就職も「平凡な」選択と考え、渡米を決めた。

米国では、専門分野にこだわらない視野の広い研究が一流とされる。院生時代に「スピンホール効果」の観測に世界で初めて成功。

米サイエンス誌の表紙を飾ったが、ポストドク（博士研究員）時代はカーボンナノチューブの研究に転じた。日英バイリンガルで米国仕込みのプレゼンは明快だ。

東京大学の「スーパー准教授制度」に倍率35倍をくぐり抜けて採択され、研究者の妻と07年に帰国した。

東大ではこれまでの研究を統合し、光と電子の量子力学的な相互作用を制御するデバイスの開発を目指す。数十年後の実用が期待される量子情報技術に「量子オプトエレクトロニクス」の新分野で挑む。「死ぬまでに（自分の研究が）使われていたら最高ですね」（藤本信穂）

かとう・ゆういちろう  
00年慶応大理工学部卒、05年米カリフォルニア大サンタバーバラ校で博士号（物理学）取得、米スタンフォード大ポストドクを経て07年4月より現職。09年度文部科学大臣表彰若手科学者賞。東京都出身。31歳。

教授制度」に倍率35倍をくぐり抜けて採択され、研究者の妻と07年に帰国した。